ラント・フリーデン陛下のあらゆる住民が必ずしも宣誓していないこと、宣誓の強制という事実があったなどの理由から、単に理念的なものにすぎない、平和運動の宣誓契約原理を全面的に否定することは、果して正しいかどうか一考を要するからである。平和運動における宣誓が konstruktiv であったか deklaratorisch であったかということだけでなく、「平和令」発布の主体者となった国家が、いかなる理由で、また、いかにして、こうした宣誓を自らの平和運動に利用しなければならなかったか、具体的転機を明らかにするのが必要なのではあるまいか。この点、ゲルンフーベルとは対蹠的な見解をとられる堀米教授が、今後、その学説をいかに展開されるかに興味を覚えざるを得ない。

（二六五頁・邦価一八八〇円）

——鯖田　豊之——

Wilfred Smith, An Economic Geograhhy of Great Britain, 1949

著者は現在リヴァプール大学専任講師の職にあり、他にも Geography and the Location of Iudustry, 1951. の著書を持つ経済地理学の新進学徒である。

本書に於て扱われる地理的範囲は題名の示す如く、イングランド・ウェールズ・スコットランドを含む Great Britain である。内容は大別して二部に分れ、英国経済の成立史に属する第一部一七三頁と、現在の英国の経済地域に関する研究の第二部五二三頁より成る。第一部に於ては先ず農業を、次いで工業・貿易・交通を扱い、第二部に於ては更にそれらの項目が細分されて、耕種農業・牧畜業・石炭産業・鉄鋼業・技術要素・羊毛業・綿工業・皮革工業・製粉業・製パン業・内陸及び海洋輸送に亘って考察され、最後に現在の英国経済に於ける海外貿易の意味が論ぜられて巻を閉じている。

本書を貫く立場は、経済地理学を飽く迄地理学を構成する一要素であるとし、具体的には経済生活の分布類型や構造類型を分析することを使命とすると主張する。而して経済生活は一般に自然・技術・文化・政治などの種々複合せる要素によって構成される為、分析の対象はあらゆる事象に広く求むべきであるとする。ところでこの様な事象は、社会現象の中に於てそれぞれ或る一定の動きを示すものであり、この様な動きとして認識される経済現象の分布類型こそ経済地理学の基礎的な対象であるとするのである。

例えば二〇世紀の耕種農業は多くの点で中世のそれに正確につながる反面、コークス利用の製鉄業が、その先駆的な形態である木炭製鉄業と完全に異つた分布型を示し、又今日のローラー製粉機も、一九世紀初頃の村落にみられる製粉機の分布と極めて著しい対照を示す様に、それぞれ、中世と殆んど変らぬ地域的分布を示す場合や、それ自らの進歩による地域的な変動の惹起など、その発展の仕方は常に或るプロセスを持っているのである。このプロセスは英国経済の全域にわたって極めて複雑な地域的変異を示して居り、経済地域の把握と雖もこの様な変化の過程を把えずには不可能である。この様な立場から第一部に見られる様な歴史的な見解が必須の要素として強く要請されて来るのである。そしてこの様な理解の仕方は、理論的には先史時代に

迄溯源すべきであるとする。経済生活は文化の連続と共に同様な様式を以て継承されるのであるが、英国経済の発達は明瞭にみられる二つの激しい変革の時期によって区別される。その最初のものは、 Romano-British と Medieval British の世界を区別するノルマンの征服であり、他の一つは Medieval と Modern の世界を時期づける農業と工業に於ける変革である。これは歴史家による時代区分であるが、地理的にも深い意味を持つものであつて、経済生活の分布類型を対象として、その特質によって区分される時代が、地理的にも各々本質的に異る性格を有するのは当然であるとする。第一章に於ける著者の農業の記述は、過去の研究成果を検討し乍ら、その取捨選択の中に現在の農業生産地域の形成過程の基礎条件を歴史的に解明するのである。その際、"Economic Geography is not static, though it has relatively static elements, but dynamic." (Foreword) と云う彼の考えは、経済地理学の研究過程に於ける経済史的考察の必要性の強調と云うべく、農業に於てはこの様な立場から、二圃及び三圃農法や、開放農地制度の問題についての豊富な文献をあげての農業技術史的考察が行われる。第二章の工業及び輸送についての考察は、生産の立地移動を通じて過去に於ける工業生産の発展が、物資需給のアンバランスと、その技術的改新を契機として行われ、工業生産と輸送の分布現象を強く特徴づけている事が述べられる。

第二部は前述せる如き項目によって展開されるが、その項目分けは、単なる分析の手段としてのみ分離的に取出されるに過ぎず、内容的には、農業・工業の地域類型を把握するだけでなく、地域の独特の景観や、経済構造の歴史的遺産との連関の多様性を追求しようとする地誌的な立場が確保されているのが注目されよう。

輸送や貿易は、或る意味に於ては経済活動の第一次的活動と云うより、その結果として起る地域分化を結合する為に行われるものである。ところで現在の農工各種の生産は、直接市場へ向けて売る事を目的とする為、生産の場所から消費市場への輸送に完全に依存し、輸送自体が生産の一部とさえ考えられると云う。反面又輸送は農業や工業の特殊な分布型によって影響され、輸送路の自然的型態だけでなく、その種類や費用によっても、又その選択が考慮されて複雑な生産費の一部をなすとする。

第二部冒頭の農業の記載の仕方は極めて簡にして要を得ている。即ち先ず土地利用の主な類型を立て、その類型の分布に影響を及ぼしていると考えられるあらゆる要素――例えば自然・技術・経済・歴史・政治等――に論及する。而して個々の地域に考察の眼を次々と移して行く。この際用いられる多くの附録の統計は極めて有用なものばかりであるが、この統計の解析に於て、全く国家の農業政策について触れる処がない。評者の卑見が許されるならば、近代国家に於て、農業がその時々の国家的政策によって大きく変動する事は常識であり、このあふりを喰つて地域的な変動が引起された例も亦少しとしない。農業に関する記述が一見すぐれた構成を持つている様に見えるにも不拘、何か一まつの弱さを感ずるのはこの故であろうか。

石炭についての叙述は、豊富な地質学的資

料や、経済統計による資源論に始つて、次いで石炭産業の鉱業経済的把握が行われるが、その収益性は、a、炭田の地質構造、b、国内・国外の消費市場への地理的位置、c、採掘技術の効率といふ三要素によって決定されるとし、炭田の立地もこの様な石炭資源の品質や量の如何と共に、社会的な技術管理的諸条件を主として、全経済地理的構造の中で定って来るとしている。こうして石炭産業の地域的な分析に進むわけであるが、例えばスコットランドの炭田についてみれば、それは薄い炭層、低度の炭質、数多い断層などが不利な条件として挙げられるが、機械化が著しく進んで能率的な経営が行われ、かつ近くに大きな消費市場をもつことが有利な立地条件の主なものとしてあげられる。イングランド東北部・ノッチンガム・ダービー・ミッドランド・ランカッシアー・南ウェールズの場合も同様な分析の仕方が進められ、これが綜合されて、二八二頁に石炭産業の自然・経済的諸性格とタイトルされた表として纏められている。

　鉄鋼業に関する記述は、先ず鉄鉱石の分析と分布から始り、鉄鉱製錬業及び製鋼業の地域的分析が行われ、これらが炭田地方及び炭田を近くに控えた鉄鉱輸入港に立地する状況を示し乍ら、現在輸入鉄鉱に原料を依存するものも、最初の立地としてはローカルな鉄鉱産地に結びつけられていた事を明かにする。最後に鉄鋼製品の加工について論じ乍ら、全体的な鉄鋼業の立地構造を取出して見せる。

　石炭にせよ、鉄鋼にせよ、いずれも英国の全生命がかかつている基礎的な産業であり、それ故に国際情勢や国内の政治情勢を敏感に反映する。この事は至る処に示される全生産量・輸出入量・地域的生産の年次変動をみても明瞭に窺い知る事が出来る。そして、第二次大戦中を通じてのヨーロッパに対するアメリカの影響力の増大と共に、英国の石炭・鉄鋼業が苦境に立至っていることが示されている。この様な状況の下に石炭産業の国有化が行われたのであるが（一九四六年）これを論ずるには時期尚早しとして論評を避けている。

　技術要素に関する章は、技術人口と労働人口の地域的分布、工場の質と規模、修理・生産・業種などの別について、地域の全体に対する地位が考察されるが、主なる視点は、農業技術者、機関技師、その他繊維・造船・自動車・航空機・電気などの技術者の分布に注がれ、これが工場の質や量と共に技術の実体をなすものとして連関的に考察され、見事に工業地域を浮立たせている。

　国民的産業と云われる綿工業に関する記述は著者の地理学者としての感覚を充分に示すものとして興味深い。先ず綿工業の成立より説き起して、立地に影響を与えている種々の要素を地域の構造与件として追求して、その地域構造と地理的意味を考察し、その貿易上のウエイトと輸出の傾向について記述を進める。最後に英国綿業の心臓であり、典型的な英国綿業の成立過程を経て形成されているランカッシアー地方についての要領を得た叙述を通じて、英国綿業の形成と発展と現況を提示する。この章に於て注意さるべきは、綿業の立地条件として従来漠然と考えられていた自然環境の意義を数量的に明確に捉えた点であろう。今迄、多量かつ頻繁なランカッシアー地方の降水が、相対湿度を上昇させ、糸切

れを防ぎ、それがこの地方の綿業にとつての有利な条件の一つに考えられていたのであるが、著者は H. W. Ogden の意見を容れ乍らそれを明瞭に数的に示している。又水質についても水の硬度に関するデータをランカッシアー地方の水道技師や水道管理当局より蒐集して、この地方の水の硬度分布図を作製し、一般にこの地方の水質が軟水である事を示して、これが綿糸の染色や綿製品の染色・捺染についての有利な条件になっている事を明かにしている。（四六四頁—四七一頁）

織布・食料品・羊毛・皮革についてはそれぞれに興味ある記述が見られるが、ここでは英国が原料を英連邦諸国を始め、自国の影響下にある諸国や、最近特に増大しつつある合衆国等より原料の輸入を行い、これを完成品として輸出する技術のすぐれた工場の役割を果している事を示すのみに止めよう。

終章に於て、内陸・海洋の輸送及び外国貿易が扱われるが、ここでは運送手段としての道路・鉄道・運河の経済的な運賃比率の相違についての論述が地理的な立場から行われて得る処多く、一層光彩を放つている。本章の記述の中に一・二の不正確な記述が内陸交通に関するものの中に存在する事は残念ではあるが、七四七頁、一二四図表にこれだけの内容を纒め上げ、よく網羅された文献の蒐集につくされた著者の努力は充分の敬意を以て認めねばならぬであろう。

更に一つ本書の為に惜しまれてならぬのは、（或いは本書が英国経済地理に関する高級なテキストブックたることを意図していることによるのかも知れぬが）本書初版が一九四九年であるのに、ここに採られた統計が、鉄鋼業で一九三五年、造船業で一九三九年などを最新のものとしていることである。これらはいずれも戦前のものであつて、英国経済の様相は戦争中及び戦後に於て大きな変動を経験しているのであり、その最も大きい動きが前述した石炭産業の国家管理であつたことは云う迄もない。ところでこれについても一九四五年の統計があげられただけで、翌年以降の変化について論評を差控えている事は我々の期待に著しく反するものであり、この点について我々は経済地理学の立場からの論評を期待したい。

本書の構成が、経済現象の分布から立地を論じて地域に終るオーソドックスな方法をとつている事は、既にのべたが、立地条件の分析の際、個々の企業のバランスシートを基礎にするような試みがなされていたならば、一層その重量感を増したであろう事は想像に難くない。

ともあれ、前述の内容の不正確さと、統計面における旧さと、いくらかの誤植とを除けば、この方面に於ける最も信頼しうるテキストブックであると云い得よう。

尨大な資料とじつくり取組み乍ら、資料の整理の過程に何物かを見出そうとする著者のひたむきな態度は、英国の伝統的な学風の中に育まれた不屈の魂を我々に感じさせる。往々にして性急に結論を求めようとし勝ちな我々を顧みる時、この様な学問の態度に学ぶべき多くのものを見出すのは評者のみであろうか。

（七四七頁・邦価一九二〇円）

（一九五四・六・九）

——押野昭生——